

about ~“わたし”を知って~

この町でいきる me 6

企画展覧会

「about me 6 ~ “わたし”を知って~ この町でいきる」

主催 / 大阪府

実施主体 / 国際障害者交流センター ビッグ・アイ

令和4年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業

6年目となる今年度の「about me」は、5年の節目を超えて新たなスタートを切ったと感じています。これまで、福祉事業所でアート活動をおこなう人や支援する人、ご家族など周縁に入る人たちの日常とつながりを作品とともに深掘りし展示という形で発信してきました。

今年度は、「人」はもちろん、「町」、「時間(とき)」を考察し、より広く、深く対話を重ねる機会となりました。今回出展くださったアトリエコーナスはイギリスやフランスなど国際的な活躍をする作家さんが何人も所属している福祉事業所ですが、その日常は、穏やかでゆったりと流れています。

ご近所を歩けば挨拶が飛び交う下町ならではの近い関係性が築かれています。コーナス設立から30年、法人化するまでを含めると40年近くこの町で生きてきた福祉事業所。お母さんたちの切実な思いと願いが「町」に溶け込んでいます。アート活動だけではなく人があたりまえに生きるための様々な活動によって、お母さんたちが蒔いた種がしっかりと根付いています。

今年でアトリエコーナスは30周年を迎えます。関わる人たちの世代が変わっても10年後、20年後、その先もアトリエコーナスは「この町」の中で変わらず存在することでしょう。

鈴木 京子

(国際障害者交流センター ビッグ・アイ 副館長・
アートエグゼクティブプロデューサー)

about me 6 実行委員会

松田 豊美 (画家、アトリエ ペンライズ)

木下 真 (福祉ジャーナリスト)

西脇 大祐 (特定非営利活動法人 WiD)

大西 雅子 (社会福祉法人ふたかみ福祉会 ハビパール)

中原 立枝・田中 弥生 (社会福祉法人富翔会 わくわく富田林・まんてん)

アルガマ 明子・笠松 彩葉 (特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス)

キュレーター・メインファシリテーター 中津川 浩章 (美術家、アートディレクター)

ディレクター 上岡 亜希 (国際障害者交流センター ビッグ・アイ)

プロデューサー 鈴木 京子 (国際障害者交流センター ビッグ・アイ)

企画展覧会

「about me 6 ～ “わたし” を知って～ この町でいきる」

開催概要

日 程：2022年12月16日(金)～20日(火)

会 場：LUCUA 1100 4F イベントホール「sPACE」(大阪市北区梅田3-1-3)

入 場 料：無料

来場者数：1229人

同時開催

ビッグ・アイ アーツセミナー「展覧会 about me 6」トークセッション

日 時：2022年12月16日(金) 18:00～20:00

登 壇 者：白岩 高子・アルガマ 明子 (特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス)

中津川 浩章・松田 豊美・木下 真・西脇 大祐 (実行委員会メンバー)

参 加 費：無料

参 加 者：24人

企画展覧会「about me 6」ができるまで

毎年、障がいのある人の創作活動を支援するアーティストや有識者、今回・前回までの出展事業所の支援員で、実行委員会を結成。そのメンバーで出展事業所を訪問して見学、支援者からのプレゼンテーションを受けて作家と作品選出、作品について考察を重ねて深掘りするというプロセスを経て、展覧会を開催しています。

2022年

8月29日(月) 顔合わせ&企画説明(今年度のテーマ、スケジュールなど)会議

10月4日(火) 事業所の見学、作家・作品選出、考察会議に向けての打ち合わせ

10月17日(月) 「特定非営利活動法人コーナスのあゆみ」インタビュー

協力：植野 淑子・大川 典子・吉川 みづほ・白岩 高子・アルガマ 明子・笠松 彩葉

10月25日(火) アトリエコーナス見学、作家・作品選出、考察会議

11月16日(水) 「アトリエコーナスのご近所マップ」インタビュー

11月29日(火) 展覧会に向けてスケジュールなどの確認・打ち合わせ

12月15日(木) 展覧会 搬入

12月16日(金)～20日(火) 展覧会 開催中 ※初日、セミナー開催

12月20日(火) 展覧会 搬出

「about me 6 ～ “わたし”を知って～ この町でいきる」に寄せて

中津川 浩章

(美術家、アートディレクター。実行委員会キュレーター・メインファシリテーター)

2017年に始まった展覧会「about me ～ “わたし”を知って～」は6回目を迎えました。

近年、障害がある人の表現活動に対する理解は大きく広がり、全国各地で展覧会が開催されるようになりました。クオリティの高い作品が多くの人々の目に触れるようになり、作品を使用したグッズやパッケージ、アパレルデザインなども飛躍的に増えています。障害がある人たちのアートの魅力を社会に伝えるための手段も多様化してきています。その一方で、障害がある人の表現活動における「作品」のクオリティ以外の意味と価値について、人々が知る機会は多くありません。

本展は、障害がある人たちの日常を生きる姿、背景にある関係性にも目を向け、作品が生まれる「現場」に足を運び、表現に隠された秘密に迫ろうとするものです。作家、支援者、そして福祉施設、さらにはその施設がある地域や流れる時間にも注目し、作品を中心にテキストや写真、映像などをあわせて展示することで、表現活動を軸としてその人の人生や福祉の在り方まで、多角的な視点で浮かび上がらせたいと考えています。

今回の展覧会で取り上げるのは阿倍野にある「特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス」です。

コーナスは阿倍野駅近くの共立通という路地にあります。人が住み暮らす息づかいが濃密に感じられる細く長い路地。隣り同士助け合って生きる昭和の下町のなつかしい匂いがする路地。その共立通にメインの

施設である「アトリエコーナス」、そしてコーナスの学校／自立訓練「Art-Labox」、就労継続支援B型「ArtLab-Next」、グループホーム「ベイトコーナス」、メンバーが働く「KIKUYA GARDEN」などがほぼ共立通沿いに点在しています。まさに路地とともに生きる、地域とともに生きる福祉施設です。

アートで評価され知られる存在になったとはいえ、障害がある人のたいへんな日常生活に変わりはありません。ふらふらと外に出てしまい道に迷ってしまったり、転んでケガをしたり、買い物をしにいったお財布を忘れたり。それでも「おっ！この人はコーナスのメンバーの人や！連絡しよっ！」と言ってくれる人がいること。だれがどこで暮らしているか近所の人たちが知っていてくれること。地域の一員としてあたりまえに見守られながら安全に暮らせることが大切なのです。

アトリエコーナスのメンバーはこの共立通で定期的に掃除のボランティアをしています。アート活動がすばらしくても、イギリスでの展覧会に招かれ出展していても、作品が売れて高名なコレクションに収蔵されていても、地域の人はほとんどそのことを知らないかもしれません。それよりも掃除のボランティアによって、メンバーは存在を知られ存在を認めてもらい地域に根をおろして生きていくのです。

設立当時、無認可の共同作業所をともに始めた保護者達と運営資金作りのためのバザーを頻繁に開催するも、その忙しさや想像を超える肉体労働の辛さに離脱する方もいたといいます。日本キリスト教団系列の保育園とのつながりでアドバイスやサポートを受けながら、少しずつ福祉施設としての役割を整えていく。そうした流れのなかで、傘釘の組立てやマット作りの内職作業から、当時少しずつ注目されつつあった障害者の表現／アート活動へと大胆にかじを切る。そこからコーナスの快進撃が始まります。数々の展覧会で受賞し注目され、大きな美術館での企画展。デザイン会社と作品を使ったコラボレーション。イギリスでの展覧会など海外での評価も高まっています。メンバーたちはマイペースながらもそんな変化を淡々と受け入れ楽しんでいるように感じられます。



人は表現することで何を求めるのか。何のために、なぜ表現するのか。その人にとって表現がどのような意味を持つのか。生きることと表現することは深くつながっています。

ファッション誌から抜け出たような女性を描く「植野康幸」。蛍光ピンク、華やかなかわいいものが大好き。あこがれの女の子たちの写真を切り抜いてスケッチブックにスクラップ。パーティーションで区切られたプライベート空間の中は、壁にも机の上にも好きなもので溢れている。

円形のシールを絶妙な重ね具合で貼っていきクリスマスツリーを作る「大西祐史」。作り始めたころはカラフルで樹の幹の部分も表現されていた。続けていくうちに幹が消え、色数が絞られ、行為性とシルエットの強さがより引き立つようになった。

絵具にボンドを混ぜ絶妙な膨らみ感を生み出す「清原雅功」。その形象はカラフルでポップ、記号のようなフォルムを持っている。画面の片隅にはなぜか赤塚不二夫のキャラクターが登場する。カラフルで透明感のある“マウスピース”も作っている。

アイロンビーズを使って作品を作る「土谷紘加」。アイスクリームのイメージがベースにあるようだが、その構成や色彩、少し溶けてつながっている質感が魅力的。アイロンビーズを使うアーティストは他にもいるが、数そしてクオリティで突出している。

作品をつくる／かたちを彫り出すというよりも、木片を彫り続ける行為自体に集中しているように見える「清水和香奈」。永遠に彫り続けて木片が消えてしまうのではないかと思えてくる。届ける相手のいない手紙のような詩のような呟きにも心惹かれる。

こうした作家たちの作品は、支援する人たちの声掛けや他愛もない挨拶、目を合わせたりあえて視線を外して語りかけたりといったパーソナルなコミュニケーションの中から生まれてきます。

近代美術の文脈では、作品はあくまでも個人に帰すべきものとされていますが、障害がある人たちの場合は少し事情が違ってきます。制作自体は一個人の表現行為ですが、それを支える周りの環境があつてはじめて表現活動は成り立ちます。作品は施設での日々の支援と密接に関係し、障害特性、発達支援、支援員とのコミュニケーション、そして地域とのつながり方などさまざまな要素が絡み合つて、その延長に「表現」が立ち上がってくるのです。

障害がある作家からどのようにして作品が生まれるのか、どんな地域に暮らし、支援者とどんな関係性を持っているのか、そうしたことは作品を目にするだけではほとんど見えてきません。一人ひとり生きている世界は異なっていて、「障害者」と一括りにしてしまうと見えなくなるものがあります。障害がある人が生きている世界のそれぞれ異なった背景を理解してこそ、彼らの表現の真のリアリティが見えてきます。アートは障害がある人のもうひとつの言語。コミュニケーションツールとしてのアートを介することで、これまで見えていなかったものが視覚化されます。

「about me 6～“わたし”を知って～ この町でいきる」は福祉や障害というスキームではなく、表現をめぐる普遍的な人間の物語を可視化しようとする試みです。about meの“me”は、作家のことを指しているながら、同時にそれは支援員や“わたし”のこともあつたのです。芸術・アートをめざしていないからこそ切実にあるいは無心に表現された作品は、芸術という制度を超えて人の心を打ち、結果的に「芸術」となるのです。



(ここから、展覧会終了後のテキストになります)

会場に展示された作品、写真、キャプションパネルなどを見ていて、いろいろな思いがよぎりました。これまで「about me ～“わたし”を知って～」シリーズでは、たくさんの作家たちを取り上げ、支援する人たちにも注目してきました。その流れの中で、今回の展示では施設そのものに焦点をあて、地域を含めて施設をまるごと深掘りしてみよう、表現活動の「場」そのものにぐっと寄って、じっくりと見てみたい。そう思わせてくれたのが「コーナス」です。

共立通を歩いていた時に感じた、なつかしい昭和の匂い。住宅がひしめき、そこに暮らし生活している人たちの気配。なにか惹かれる磁場を直感的に感じたことも、個人的にはかなり大きいモチベーションでした。すこし歩いて坂を下ると飛田新地、そして逆方向に歩いて行くと「あべのハルカス」の超高層ビルがそびえるというロケーション。昭和と令和の狭間にある路地に、未来の芸術が息づく場所がある。路地に生きる、というと中上健次の熊野を舞台にした濃厚な小説世界を思い起こしますが、阿倍野の路地も負けてはいない。濃密なノスタルジア、そしてエネルギーを放つ場所です。

今回の会場は、大阪駅に直結した比較的若い人たちが集まるファッションビルの中にあります。「LUCUA 1100」という現代的な空間にアトリエコーナスの作品たちが絶妙にマッチしていました。それは、飛田新地とハルカスのあいだにあるコーナスの在り方と重なりあっているようにも感じました。買い物ついでに、何の気なしに展示空間に足を踏み入れた人が何人も、それぞれ作品に見入っている、その光景に不思議な感覚を覚えました。日々の支援によって生まれた「表現」が、社会のもの＝「アート」に変わる瞬間です。

作品を見てドキッとする。そしてキャプションを読む。そこで初めて見えてくることもあります。なぜこのような表現が生まれるのか、その謎が少しずつ解けてくるような気持ちになります。ピンクの色使いが非常に印

象的な植野康幸の作品は、一緒に展示されたパネルを見れば、じつは彼の日常生活自体が驚くほどピンク色に満ちていること、生まれてくる作品はその地続きであることが分かります。土谷紘加のアイロンビーズ作品は、一枚一枚どれも異なる作品であるのに、168枚が壁一面に集まるとそこに規則性と統一感が立ち現れ、未来の曼荼羅のようにも見えてきます。

生活、制作、支援、施設、地域、すべてが重なり合って生まれてくる表現たち。なぜ、才能とオリジナリティに価値を置く「アート」と、公平性と平等性が価値となる「福祉」という、一見、水と油のような価値観が化学反応を起こし、奇跡のような作品が生まれてくるのか。「about me 6 ～“わたし”を知って～」は、たくさんの問いを私たちに投げかけています。

中津川 浩章(なかつがわ・ひろあき)



美術家、アートディレクター。美術家としての制作活動と同時に、さまざまな分野で社会とアートの関係性を問い直す取り組みを行う。表現活動ワークショップ、バリアフリーアートスタジオ、美術史ワークショップ、講演などを通じて人間が表現することの意味、大切さを伝えている。アートスタジオディレクション、展覧会企画・プロデュース、キュレーションを数多く手がけ、川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎とアル・ブリュット」展キュレーター、「ビッグ・アイ アートプロジェクト」展覧会アートディレクターなどを務める。



about me 6

Contents

- P.2 「about me 6 ～ “わたし”を知って～ この町でいきる」に寄せて
中津川 浩章 (美術家、アートディレクター。実行委員会キュレーター・メインファシリテーター)
- P.10 出展事業所「特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス」って？
白岩 高子 (代表理事)
- P.12 作家さんと作品を紹介します！
特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス
植野 康幸 大西 祐史 清原 雅功 清水 和香奈 土谷 紘加 大川 誠
- P.48 about me 6を終えて～アトリエコーナスより～
アルガマ 明子 (施設長) 笠松 彩菜 (スタッフ)
- P.50 “近所さん”から見たコーナス
●コーナスの歩みと出会い—阿倍野の古き街角から—
池田 美芽 (大阪キリスト教短期大学 特任教授)
●地域と共に 村井 由里子 (タマリバGROUP 代表)
- P.56 実行委員会メンバーに感想をうかがいました！
●アートのある、ごくふつうの日常 木下 真 (福祉ジャーナリスト)
●「about me 6 ～ “わたし”を知って～ この町でいきる」を終えて
西脇 大祐 (特定非営利活動法人WiD 理事長)
- P.60 資料(チラシ、リーフレット、重画)

作家・作品紹介ページでは
実行委員会メンバーが作品から作家を知るために考察し、
議論した内容の一部を紹介しています！

「about me ～ “わたし”を知って～」では、出展事業所を見学し、考察会議を行っています。

作家にとってその表現にはどんな意味があるのか、その表現と日常生活にどんな結びつきがあるのか。何もなしところからの話し合いでは、考えや意見を言い出しづらいことから、実行委員会メンバー全員が考えたり意見を出したりするきっかけや手がかりとして、以下の7項目の考察軸を設けています。

考察項目

①持続性／表現を重ねた時間、時間との関係性があるか

②必然性／その表現が、本人にとって必然性があるか

③他者との関係性／家族や支援者、事業所、地域など、いろんな関係性が見えてくるか

④コミュニケーションツール／何かを伝えるコミュニケーションツールとなっているか

⑤障がいとの関係／障がいとの密接感、こだわりがあるか

⑥本人の背景・日常が見える／本人そのもの、日常が見えてくるか

⑦「アート」以上に根源的な問いかけがある／「アート」以上の価値(生きるために必要なもの、
「せずにはいられない」という切実感があるものなど)を提示できるか

障がいのある人の表現活動の環境を整え、表現活動から豊かな時間を創造していくには、作品に内包される作者自身や取り巻く人とのつながり、日々の暮らし、生み出される数々のものなどを多面的に捉えることが大切です。この考察軸を、障がいのある人の表現活動を支援する際の参考にさせていただければ幸いです。

特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス

アトリエコーナス(since1993)は、知的障がい者の生活介護施設です。障がい者の母親たちが「どんな重い障がいを持っていても地域で生きる-normalization」の理念を実現するため設立しました。当初は狭くて暗い共同作業所で、低賃金の傘釘の組立て作業をしていました。というのも、彼らにできる仕事は単純なものしかなかったからです。

ある日、他施設で生まれる絵画作品を目にしました。これまで見たことがない表現と奔放な線や色使いは、エネルギーに満ちあふれていました。今のような内職作業では、彼ら本来の個性、感性が発揮できない。2005年、私たちは古い町家を改修してアトリエを作りました。「ひとり一人が自己を自由に表現するアート活動を始めよう!」、内職仕事をやめてアート活動に舵をとり直しました。今、振り返ると、自然な流れでもありました。

好きな画材、色、絵筆で、好きなものを描き表現すればいい。開放的なアトリエ空間で、自由なアート活動が始まりました。次第にメンバーやスタッフに笑顔が増え、みんなの笑い声があふれるアトリエに町の人々が自然に訪れるようになりました。なにより驚くべきは、じっと座っているのが困難なメンバーが、静かに座って自分の世界に没頭していることでした。私は、これまでと違う、未来につながる何かを予感しました。



「近所でも人気!
コーナスクッキー」

「キレイなほうが
気持ちいいぞ」



アート活動を始めて5年が経つ頃には、国内外で高く評価されるようになりました。その時、私はやっと気づきました。愛情という名のもとに彼らの自由を奪ってきたのは、私たち親、家族、社会であると。「できるわけがない。」と、私たちは常に行動・表現・選択を制限してきました。だから、彼らはアートによって、生きる自由や生きる力を取り戻しているのかもしれない。

共立通に移転して18年目。道・公園・保育園の清掃活動も地道に続けてきました。「ありがとう!ご苦労さん。」ご近所さんの言葉が、なによりの支えになっています。これからも「normalization」の実現のため、アトリエコーナスは共立通に在り続けます。

【代表理事/白岩 高子】



げんきに
あしはっ!



植野 康幸

(うえの・やすゆき)

言葉を発する事のない康幸さん。2006年から描かれた作品を通して、周囲はようやく本人の内面を窺い知る事となります。

さらさら金髪ロングヘア。濃ゆいアイメイク。キリリと尖るピンヒール。見えそうなマイクロミニ。紺色女学生のありふれた制服姿。

『こんな風なの好きなんだ。自分もあの頃着てみたかったんだよ、プリーツスカートの制服を。』

『そうそう、昔見たミンガールズ。あれ今でもはまっちゃって。』

『いじめっ子女子の世界。あのえげつなさに心摺まれるとこ、あるのよねえ。』

制作をはじめてから、素朴な容姿の康幸さんはみるみる華奢になっていった。口元はほほえみ、ふっくらした頬はちょうどよくびれて細い顎につながった。多分唯一、自分で自分を女子と認められるであろう細い指と誰より優雅な爪のかたち。時折それを見つめては何度も何度も下絵を直す時間。

そういえば鉄道関連も好き。地下鉄ホーム柵〇〇駅2022年〇月設置。JR〇〇線に新駅開設。どこからか知った情報をメモに書いて知らせる康幸さん。2020年からは、パソコンでワード入力を覚え、スタッフがプリントアウトしたら、昔から続けているスクラップ帳に切り貼りしています。出来上がったと見せかけ、これも探求心旺盛だからか、忘れた頃に貼りなおしたり構成を変えたりしています。

全国の路線に詳しく、レディスファッションを描く康幸さん。これで合ってるのか怯えながらワード入力をする康幸さん。パニックのとき野太い声を出して叫ぶ康幸さん。仲間の絵画展示に嫉妬する康幸さん。外食で一番高いセットをためらうことなく選ぶ康幸さん。

自分の好きを貫く日々の康幸さんはとても強い。試行錯誤しながら自分の関心だけで構成した作品群に、どこかの誰かが共感するだろう。そのまま素直でいて。恥ずかしい事なんて何一つもない。

【施設長／アルガマ 明子】





①無題／紙、色鉛筆、鉛筆

②アイテムコレクション2／紙、鉛筆、色鉛筆

③無題／紙、鉛筆、色鉛筆

④ハイポーズ／紙、鉛筆、色鉛筆

⑤イメージの共有2022／スケッチブック、紙、水性インク、油性インク、セロファン、のり



ピンク色消費のはげしい植野さん。好きなアイテムや大好きなキャラクターを繰り返し登場させます。それらを配して囲いをつけるのは、紙面のデザインをする感覚かもしれません。連ねた人名は植野さん、アラフィフということで、その世代の芸能人や、なぜか当時の同級生だったりするのですが、本当ならそこに気の利いたキャプションを書きたいのかもしれませんが。それは相当難しいゆえ知ってる名前を埋めているのかな？と。出来る事や持ちネタで勝負する。何よりも『好きなものをあらわしていく』熱意。下絵は根気強く、何度も書き直しています。【施設長／アルガマ 明子】



⑥ミーンガールズ・コレクション／キャンバス、紙、色鉛筆、鉛筆、水性インク、油性インク、羊毛フェルト、アイロンビーズ、テープ

タイトルどおりあのキャラクター連発です。でもどの顔も結構違うんですね。体形も違う。何年描いても飽きないってこれか。そのほか長年の憧れ、月に代わってお仕置きの人・某亀有公園前派出所の超ミニの警官など好きで固めた作品。【施設長／アルガマ 明子】

⑦メリクリガールズ／紙(ボード貼付)、鉛筆、色鉛筆

⑧秋ハイファッション／紙、鉛筆、色鉛筆

海外雑誌のお気に入りのページから。斜め顔や腕を組んだポーズが難しかった様子。スタッフが線をおこし、それを見て描いたパーツもあります。植野母がこの作品を見たとき、何度も書き直し黒ずんだ女性の上唇部分を『…エ？ 剃り跡あるやん。』と言ったことが衝撃でした。経過を知らなかったら、まあそんな風に見えるよなど。【施設長／アルガマ 明子】

持続性

笠松 一貫して同じ好きなものがあるので。ワークショップで違うことをしますとなっても、そのモチーフを意地でも入れてきますね。

アルガマ 明子 書初めなのという時も、「おんなのこ」「ハイヒール」とかね。

必然性

上岡 植野さんの制作スペースを見ると、なくてはならないものと思うよな。

中津川 ああいうふうに表示するまではどうだったのかは気になるよね。抑圧していたわけじゃん。自分のやりたいこととか、好きなことを。

鈴木 植野さん自身、自分の性認識がきつとあったと思うんですね。男性なのか、女性なのか。はっきりとはなくても、その揺らぎを何十年も持ってこられて。表現する中で自認していくもの、解放されていくものがあったのかもしれないって。

中津川 植野さんは自分を男性と認識していて、女性とは思っていないんだよね?

アルガマ 明子 結構、女性なんですよ。

鈴木 女性の名簿の中に、自分の名前を書いてはるんです。

松田 でも、女装はしない?

アルガマ 明子 しないんです。

笠松 自分が男性やからこそ、そこに入りたいと思っているのかも。わからないですけど…

中津川 トランスジェンダーとも違うし…

アルガマ 明子 そのへんは本人の中でも、もやっとしていて。

中津川 難しいところがあるもんな。

上岡 波形的な、スペクトラムというところなんですかね?

中津川 かもしれないですよ。

笠松 アートとして表現する時には女性のものという…そこは描きたい。

中津川 表現していく中で、自分はこういうのが好きなんだってだんだんと見えてきた時に、固定化してくるというか、そういうものがあるんだろうなという感じはするよね。

鈴木 だから、植野さんにとってはこの表現は必然なんかになって。

中津川 子どもの時にはぼんやりとしていたもの、違和感みたいなものが、表現していく時にだんだんと確信に変わってきたというのはたぶんあるんだろうね。

笠松 自分ってこういうのが好きで、これが自分なのかもって。

中津川 自分のジェンダーとか、そういうことを。



上岡 支援していく上で、そういう揺らぎめいたものを受け止めてきているわけじゃないですか。そうしていくことによって、植野さん自身は安定していったとか、そういう何かはあるんですか?

笠松 実生活の中に、自分の好きな要素を取り入れることができた、希望が通った、ということはあるかも。

上岡 そもそも不安定なことってあったの?

笠松 不安定だった時もあります。

中津川 何をもって安定とするかというの、ちょっとわかりづらいところがあるもんな。

松田 入っているんな、男性性や女性性があるじゃないですか。植野さんはそれを全開に出せているんかなと思いました。それがすごいなって。

中津川 誰もみんな、あるよね。

松田 一般的に健常と言われる人のほうが出せないじゃないですか。こう出せることとか、受け止める器があるのが、すごいなって。

中津川 本当にそうですよ。そこらへんの問題はかなり深いですよ。

他者との関係性

鈴木 ビッグ・アイでアート展が始まった2011年のことですけど。その頃、「植野さんが描いてくる絵は女性だけど、顔はみんな植野さんやね」「自分が着たい服とかなりたい姿とかが投影されているのかな」という話をしたのを覚える。そのあたりで性認識がどうなのかはわからないけど、憧れは憧れ…



コミュニケーションツール

中津川 この人はこうなんやという情報量がめっちゃ多いから。そこで、コミュニケーションになってくるよね。植野さんはどういう人なのか、絵を見たらだいたいわかっちゃうくらいに、絵の中にいろいろな情報が入っているから。絵を読み取ってコミュニケーションをするというのに、ものすごく入り込めるなと思って。そういう感じがあるね。

障がいとの関係

中津川 絵のほうが、いろんな意味で情報量が多いよね。コラージュのほうはコレクションというか、好きなものを集めたいというハンター的な感じ。それもつくり出すという感じではなくて、選ぶという感じでしょ。絵はつくり出しているもんな。選んだ情報をもとに自分で描いているという。絵のほうが、植野さんの世界観がより深く出てる。そのかわり、コラージュのほうがわかりやすいですよ。誰が見てもわかるもの、共通言語のものを選んでるから。

本人の背景・日常が見える

鈴木 ほしいものや好きなもの、なりたい自分が全部絵に表れている。

大西 祐史

(おおにし・ゆうじ)

2013年アトリエコーナスにてアート活動開始

入舎当初は「折り紙で作った輪飾りを首にかけて写真を撮る」というアートをされていた大西さん。けれど次第に飽きてきたのか輪が少なくなり2個にまで減ったそうです。じゃあ別の事をしてみよう、と当時のスタッフと大西さんと2014年頃に始めたのが今も続けているクリスマスツリー。大西さんの好きな「丸」と「クリスマス」を掛け合わせたアートです。

いらなくなったコピー用紙をツリーの形に切って色画用紙の上に貼り、その上から丸シールを鱗のように貼り詰めていきます。ツリーの形、シールの色合いや大きさ、1日に作る枚数は様々ですが一貫しているのが作った作品を破り捨てること。金タワシで画面を擦り(昔は濡れた雑巾やスポンジを使っていました)、穴が空いたらそこから紙を破りゴミ箱に捨てるまでがルーティンのようです。

頑張って小さいシールをたくさん敷き詰めても、お気に入りのシールが混ざっても、楽しいイベントがある日も、嫌な事があった日も関係なしにアトリエコーナスに来たら必ずクリスマスツリーを作り、決まった枚数を破る大西さん。せっかくだから…と破らないようお願いしてみたこともありましたが、破りたい時は破る！もうこれは「作品が完成したらサインを書く」と同じように、破ることまでが大西さんにとって制作なのでは？！と思ってからは止めないように。そうするとだんだん破る数が増え、最初は1日に作ったうちの半分は保管していたのが今では作った作品全てを破り捨てるようになりました。

…とはいえ、できたものが形にならないのは寂しくて、破いたものを回収してみたり(画用紙が濡れていたり他のゴミと混ざってなかなか難しかったです。その後、本人が捨てる！ということで回収もしなくなりました)、写真や動画に残してみたり、雨の日に作った作品は雨水につけるので洗濯バサミにつけて乾かしてみたり…色々なやり方を試してきました。今回の展示された作品はそんな過程があって生み出された作品のごく一部。もちろん展示されている作品も魅力的ですが、その背景にあるなんとか保管できたものや破り捨てられた膨大なクリスマスツリーがどんなものだったのか是非、想像していただければと思います。

【スタッフ/笠松 彩菜】

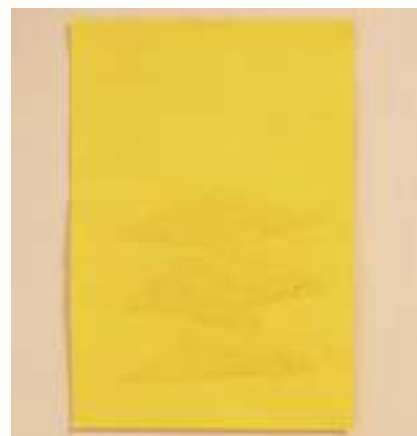


①

②



③



①カレンダー 2014 / 紙、インク

②破れたツリー / 紙、シール、鉛筆

③雨のクリスマスツリー / 紙、シール、鉛筆

雨の日に作った作品をアトリエコーナース中庭の水たまりに浸して、洗濯バサミで乾かした作品。一見ロマンチックなタイトルが、経緯をそのまま名付けただけ…というギャップが面白いです。【スタッフ/笠松】



④



④クリスマスツリー / 紙、シール、鉛筆

大西さん初期の作品で、今は省略されている天辺の飾りと幹の部分が表現されたTHEクリスマスツリー、一方で葉っぱの部分だけを作ったものは最近の作品。どちらも魅力的ですが、形がシンプルになり自由度も増した作品を見ると、大西さんの中で何を一番作りたいのかが変わってきているのかなとも思います。【スタッフ/笠松】

←2018年に入選した公募展のイベントでワークショップを開催。講師として来場者の前で大西さんが作ってくれました。作品は完成させるか破るかなので、途中の作品はとってもレアです！【スタッフ/笠松】

⑤卒業したぞうきん / 布

ミイラの包帯みたいにポロポロの布、実はこの雑巾を使って大西さんは作品を破っていました。雑巾を濡らし作品の裏面をゴシゴシ穴が開くまで擦って破り捨てる。そうすることで手で破った時とは違った断面が生まれます。破るまでが作品の大西さんにとって、「手で破る」では表現できない何かがあるのかもしれない。【スタッフ/笠松】

⑤



持続性

笠松 入舎当初のことは、私は実際には見ていないんですけど。その時は別の制作をされていて、その次に何をしていたこうなった時に、本人が好きなクリスマスとシールを組み合わせ、現在の制作に移行したのが2014年頃。それからシールでつくっては破りを続けていて。ワークショップでほかのことをしても、そこに戻ってくるというところで持続性が強いのかなって。

アルガマ 明子 制作しなかった日がないという感じですね。毎日制作している。職員から促されてではなく、自分で準備してやる。シールがない、紙がないなら、「これがない」ということを職員に言うてくる。

笠松 「午後から出かけます」という日であっても、午前中には必ず何枚か、つくっていくし。

中原 時間との関係性というところで、なんとなく見えてこなくて。表現を重ねた時間は長かったんだろうなと思ったんですけど。時間との関係性で悩んで…集中して取り組んでいる時間は短いかになって。

中津川 持続性はあるし、制作している期間も長い。最初は幹があってカラーだったのが、だんだんと抽象的なものに変化してくるみたいな、時間の重なりはあるけど。割とソフトな感じ。

鈴木 大西さんの作品はポップで明るい感じのだから。執着というところまでは至らないのかな。

中津川 強迫観念的なものを感じないから。

アルガマ 明子 からっとした感じ。

木下 同じ感じのつくりをじっと重ねて。それが、少し変化するという感じだから。いろんなものをつ

くるというよりは、自分の中で煮詰まってきたら少し変えるみたいな感じが、時間との関係性があるかなと思ったんです。じわじわといく感じかね。

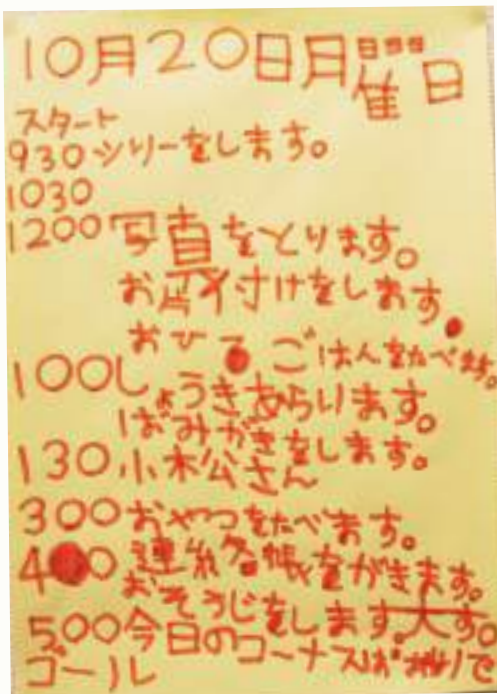
松田 つくった後に紙がなかったり、紙をセーブしたりしたらちょっと怒るという話だったので…

笠松 探すとか、スタッフが出してくるのを待つとか。

中津川 そう考えると、かなりぎゅっとしているんだね。作品はポップでかわいいし、おだやかに見えるけど、彼自身はかなりこだわりが強いんだ。

アルガマ 明子 暴れはしないんですが、大声を出したり…

上岡 作品だけを見ると変化をすごくしている。あれはゆるやかな変化？ 劇的な変化？



中津川 ゆるやかでしょう。じっくりじっくり。それこそ、木下さんが言うように、煮詰まったら色を絞ってみよう、だんだんと下のほうはいらないや〜とか。自然の流れの中で変化してきた感じ。

松田 自分がおもしろいところだけをやっている。

中津川 自分がドキドキするところだけ、やっているんだよね。

松田 この形の中で、色の組み合わせが楽しいというところ、一番の楽しみだけをやってる。評価とか関係なく。

上岡 イベントに行った後でも、「これをしたい」みたいな感じですか？

笠松 空き時間があると思えばやりますね。アート以外にも本人が日々やることは決まっているんですけど。朝に身体を濡らして服を着替えて、制作をして、連絡帳を破って…服を3回濡らしては着替え、濡らしては着替えを…

アルガマ 明子 中庭のところで、ちっちゃいコップにあらかじめちよっとだけ水を入れておいて、「これをお願い」って。

上岡 そうやってどんどん水の量を減らして行って、今は拭くくらいにという？

笠松 季節によって被る量は変化するけど、約束した範囲内でできます。

アルガマ 明子 昔は台所でしていたのですが、お互いに折り合っていくというね。人に迷惑をかけていないかどうかを考えながら、折り合っていくって、ちよっとの水でやってくれるように。

上岡 作品と水の結びつきが見えてこなかったんですけど、水との関わりがある方だったんですね。

中津川 水に対するこだわりがあるんだろうな。

笠松 水に限らず、1日の中でいろいろやることを決めていて、それ以外の時間にアートをする。

上岡 支援する側も、そのアートをする時間はあったほうがいい感じだと？

笠松 アートに関して、大西さんに「やります?」と言ったことはない。勝手にやってるんで。

中津川 促す必要はないんだね。

笠松 ほかのみんなはおやつを食べてゆっくりしていて、アート活動は今日はしないかなという空気があっても、大西さんはやってるんです。



他者との 関係性

西脇 ご自身の内発的な強い意思でされていると感じるところはありつつ、スタッフさんの働きかけによって残っている作品もありますね。「残しておいてもいいですか?」と聞かなかつたら、残ってなかったりすると考えると、スタッフさんの関わりは大きいのかなと思います。

中津川 作品としてとっておこうが何をしようか、その人が必然的に表現しているの。そういう意味ではあまり他者は関係ないのかなって。でも、とっておいてくれるから次につながっているものがないわけではないよな〜とも。促さなくても主体的にどんどん表現している。それを人に見せるわけでもないし、作品という概念にも執着していないところで言うと、自己完結している感じが強かったので。だけど、とっておいてくれるから持続しているところもあるのかなって。やっぱり人だからな〜ってね。

アルガマ 明子 作品展を見に行くと、なかなかよかつたなって自分で思ったり…そういうことは言わないですよ。でも、本人的には見ているというのはあるから。誰かのために描いているということは一切感じないんですよ。作品を見つめた時には、自分だけの世界という感じで。けど、こうやってスタッフが残している現実があるから。それに、制作の途中とかを見ると、関係性はあって。クリスマスツリーは、今は折り紙を土台にしているけど、昔は家から持ってきた弟が通う事業所のスケジュール表の裏紙とかね。そういうのを私たちは見ているから、家からとってきてるねんとか。私たちが使ったらあかんよという紙をとって、次の土台にしたりとか。プロセスを見たら関わりがあるんですけど、出来上がったそれに関しては、関係性とかなんもない、突き放されたような、からっとした彼独特の作品で。

田中 クリスマスツリーって、楽しいイメージのほうが強い印象があるんですけど。あの作品だけを見ると、さみしげではないんですけど、楽しさは感じ取れなくて。たとえば、ツリーの横に誰かの顔があるとか、家族の思い出があるとか、背景からは感じられるかもしれないんですけど、作品だけを見た時には感じられなかった。



本人の背景・日常が見える

笠松 作品だけを見ると、ポップなイメージでフラットな感じなんだというのがあって。そうすると、本人の日常が作品を通しては見えてこないなって。

松田 制作時のブラシを使って破る行為を見た時に、本人の感覚というか、持っているパワーはすごく見えるなって。

笠松 どこを作品として残すかにもよると思うんですよ。紙一枚完成してクリスマスツリーとして残せたものを作品として見るのであれば、日常はなかなか見えないと思うんですけど。それを、最初濡らして…つくって貼って破るところまで、彼の行為全体を作品として見るのであれば、日常も見えてくるのかなって。

「アート」以上に 根源的な問いかけがある

松田 破るまでの行為が強烈すぎて。なんかもうアートじゃないなって。残したいとかじゃなくて、最後破ってしまうところへんが、なんか違う次元の話で。作品・展示という概念が関係ないところで、生きてはるみたい。



清原 雅功

(きよはら・まさとし)

2016年アトリエコーナスにてアート活動開始

ペン、絵の具、紙粘土、プラ板と様々な画材を駆使して制作をされる清原さん。彼の指先から生まれる定規を使って引いたような正確な線、レタリングされたような文字、型を使って作られたような厳密な立体物からは並々ならない「かたち」に対する愛着を感じます。

モチーフは身近な記号、体のパーツ、好きなアニメなど多種多様。好きなものを描くのはもちろん、自分のしたいことや欲しいものを絵や文字で伝えてくれることもあります。ミキサー・紙・お金・近所のショッピングモールの絵を描いて、紙を細かく切る機械=シュレッダーを買いに行きたいと教えてくれたり、自宅で無くしたマウスピースが欲しいから、とプラスチック粘土で自分の歯形を取ってみたりととってもユニークです。

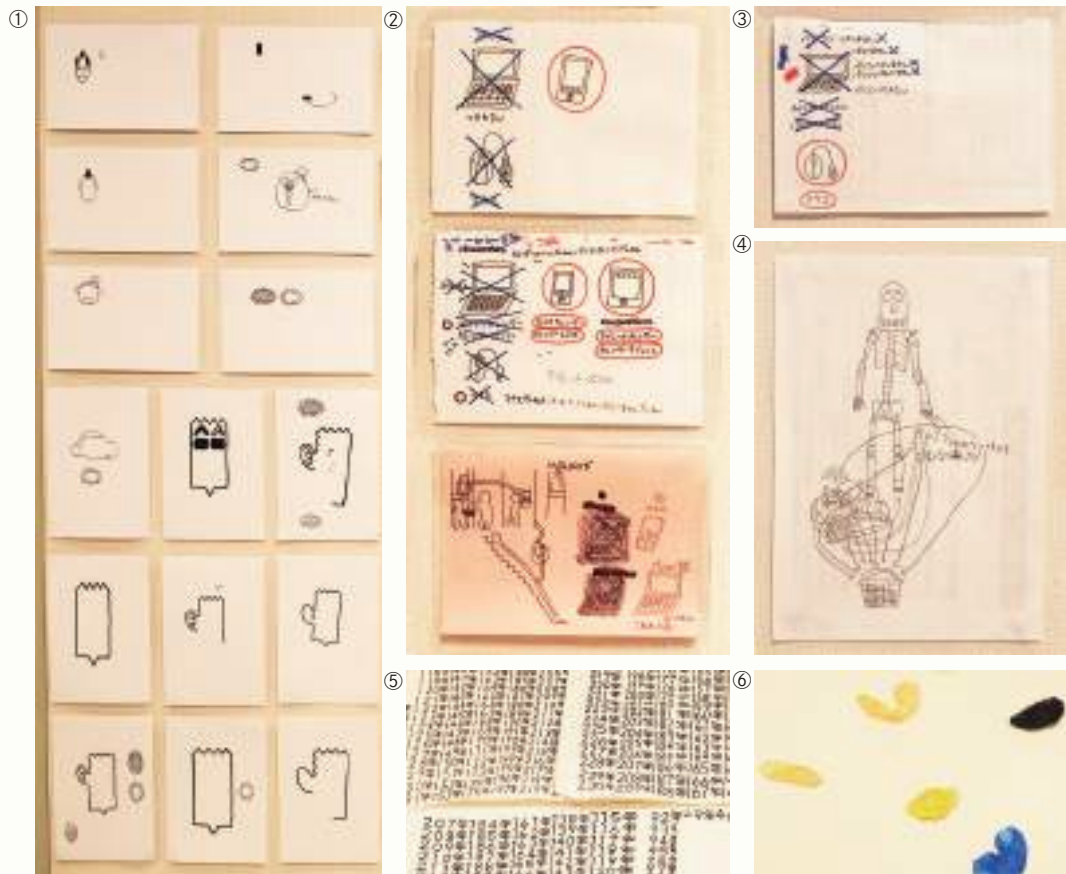
最近では年号や桁の名称に夢中で、電子パッドや紙に9999,9999,9999,9999,9999,9999年と年号を書き、それをスタッフと読み方をパソコンで調べながら読み上げることを楽しんだり、000年・001年・002年と年号を書き続けてみたり…自分が「これ!」と思ったものをとことん追求するエネルギーを持った方だなと思います。

ただ「かたち」に愛着がある分、こだわりも凄まじいようで私たちでは気づかない小さなミスも納得できず、作品を破り捨てることもしばしば。さらには自分や自分の作品が写った(ちいさいものでも)写真を捨てることもあります。

いつか清原さんが納得できる完璧な形に辿り着く日が来るのか…遠い道のりかもしれませんが、過程も楽しみながら眺めていたいと思います。

【スタッフ/笠松 彩菜】





①無題／紙、水性インク、油性インク ②無題／ポリエチレン、紙、水性インク

③パソコン つかいません×／紙、油性インク、水性インク ④かいこつ／紙(裏メモ帳)、鉛筆

清原さんにとってアートは言葉だけでは伝えられないことを伝えてくれるコミュニケーションツールでもあり、欲しいもの・したいことを絵で描いてくれます。メモをもらったスタッフはメモをヒントに清原さんと話しながら彼の要望を探っていきます。これらの作品(②③④⑦※P29・30も参照)で清原さんは何をしたかったのか…皆さんも是非、推理してみてください。【スタッフ/笠松】

⑤巻き戻しカレンダー／紙、水性インク、プラスチック容器

年号を書くことに目覚めた清原さん。フォントのように均等な字で書き進めています。破れたりくしゃくしゃなのは書き損じてしまったから。え?どこが?!となりますがよく見ると年数が重複していたり、数字が微妙に崩れていたり。こんな小さなミスで…ともなりますがこれが清原さん。形への愛に感服します。【スタッフ/笠松】

⑥マウスピース／プラスチック粘土

自宅で使っていたマウスピースをなくし、ないなら作る!と誕生したのが本作。お湯で柔らかくなる樹脂粘土をクッキングシートに包んで歯形を取りました。これらを本当に使うことはありませんでしたが、熱意もあって無事新しいマウスピースを購入できました。【スタッフ/笠松】



⑦無題／紙、水性インク、色鉛筆

⑧何回も (no.5)／紙、水性インク、油性インク

⑨しかく／紙、アクリル絵の具

⑩無題／紙、アクリル絵の具

⑪きゅうりのズボン／紙、アクリル絵の具

⑫無題／紙、アクリル絵の具

⑬たまご／紙、アクリル絵の具

⑭無題／紙、アクリル絵の具

⑮まる／紙、アクリル絵の具

⑯どろどろ 2 /キャンバス、アクリル絵の具、メディウム



⑰



ペンや鉛筆で書くことが多い図形や記号を絵の具で描いた作品。最初は平面的でしたが徐々に立体的に!ただそうすると絵の具が重力に負けて画面に広がってしまい、失敗作として捨ててしまった作品も…。残った作品には水分量を調整したりメディウム等を使った試行錯誤の跡が見えます。【スタッフ/笠松】

持続性

木下 試行錯誤しないと出てこない表現だなと思ったんですよ。ある時間を経て出てきた作品かなと思ったので。

中津川 説明的な絵も描けるし。抽象的な、造形的な、自立性の高い作品も生まれてきている。

必然性

中津川 試行錯誤をしているんなことをやりながら、あそこにたどり着いたという必然性があるので。ああいう作品は、ほかで見たことがないわけよ。結果だけを見たら誰にでもできそうじゃん。でも、見たことがない。

西脇 必要に駆られてされているものが多いように思います。ほしいものを伝えるために描かれていたり、マウスピースもなくされたことがきっかけだったり。

コミュニケーションツール

西脇 はさみを持っている手の親指が赤くなっている、矢印をして「いたい」と書いてあって。すごく伝えておられると思います。

上岡 漫画チックな感じですね。

鈴木 めちゃくちゃ細かく、リアルに描いてはって。パソコンは嫌やけど、スマホはほしいというのが…

アルガマ 明子 パソコンはスタッフが触るから触らんといて、スマホはええよということ、自分で表現しはったんやと思いますよ。人が言うてることを聞いて。

鈴木 スタッフさんが言うてる注意書きも、文字じゃなくて、絵で全部描いていた。そっちのイラストを見ると、ほぼほぼみんなコミュニケーションツールになった。

中津川 表現の中心が、あのもっこりさんだとすると、そのもっこりさんはそんなにコミュニケーションツールにはなっていないところがある。でも、つながっているのは確かだなとは思うんだよね。彼にとって両方、必要な行為だもんね。

アルガマ 明子 字とか、絵はうまいねんけど。伝え方がずれている時もあったり…この間も、自分が怒ったことを「自分が怒られた」と言って、私が怒られたのに「ねえねえアルガマさんこわかったよ」って。私、怒ってないでっていう。絵もうまくて、伝えられていることもあるけれど、「いやいや」というところは、ちょっとあるよっていう。それで言ったら、「アルガマさんが怒られて、あの時こわい思いをしたんだ」ということをほかの人に言いたかったんかもしれへんし…ちょっとわからない。



笠松 自分にすり替えて、「自分がこわかったから怒った」にしたのかもしれないし。

アルガマ 明子 そのへん、コミュニケーションに推理が入りますよというところがありますよね。

木下 幼児にはそういうところがあります。他者を叩いて相手が泣くと、自分が叩かれたって。一体化しちゃう。たぶん、そんな感じじゃないですかね。

上岡 一体化しちゃうんですね。

笠松 コミュニケーションツールとして使おうとはしているけど、本人が本当に伝えたいことを伝え切れているかというのは、確かに…絵から見てもちょっとずれたりしている。

障がいとの関係

鈴木 小さなミスも納得できず、作品を破り捨ててしまうというところで。何が失敗かはわからないんですよ。きれいに描いて、成功したものとどこが違うんやろうと、よく見ないとわからないんですけど。彼の中にそのこだわりがあるんやろうなって、イラストのほうは見て思ったんですけど。

「アート」以上に根源的な問いかけがある

笠松 つくりたいもの、描きたいものが決まっている…完成形があるのは、アートに近いものがあるのかなと思って。

アルガマ 明子 清原さんの作品って、どこに出して、誰が見ても、「かわいいやん」「きれいやん」というのが第一印象で。私も同じようにいつも思っているんです。彼が字を書いた時とか、作品をつくった時とか…「根源的な問いかけがあるか」は、あまり考える必要がない作品やなって。背景を見ると、アートは関係ないんですけど。そこそこしんどい日常を過ごしている中で、出来上がった絵は割とのほほんとしてたり。そんなにしんどい状況が見えてくるわけでもなく。素直に、作品として見た時に、かわいい、おもしろいと思えるから。



清水 和香奈

(しみず・わかな)

1994年生まれ。2020年より制作活動をはじめ。

清水さんはとても物静かな方です。学生の頃はおしゃべりが大好きで、目立ちたがり屋さんの活発な女の子だったそうですが、学校を卒業して作業所に通うようになると、環境の変化もあり、自分を出すことがだんだんと減っていきました。

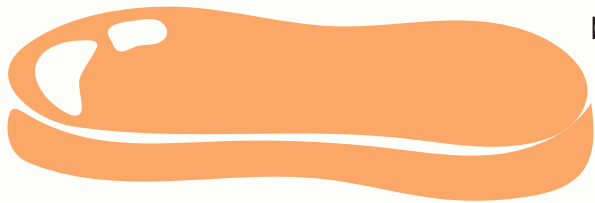
そんな彼女がアトリエコーナスに入舎されたのは2020年。最初の2年間は、「お手紙」として文字を書き連ねていく作品や、紙を小さく小さく切っていく「チョコキチョコキ」の制作を行なってきましたが、当初はそれらもスタッフから提供して取り組んでいました。しかし最近では、コミュニケーションカードやタブレットのメモ機能、手での合図で、やりたいこと・やりたくないことを自分でスタッフに伝えてくれるようになってきました。今年に入ってから、ポンドと絵の具を混ぜてクリームをしぼるようにして絵を描いたり、何日もかけて木の板を削り込んでいたりなど、色々な新しいことにも取り組み始めています。このような制作を通したやりとりの中で、彼女の好きなものや、内面の明るさ・面白さ、そして時々めんどくさがりやさんでありながらも自分を曲げない強さを持っていることを、周囲にいる私たちは知ることができます。清水さんにとって制作活動は、自分の意思を表現するという力を取り戻す手段の1つなのではないでしょうか。

文字を書いたり、絵の具を使ったり、彫刻をしたり、材料も手段も多様な制作を行なっている清水さんですが、作品は細かな文字や、絵の具の点々、木の削り跡など、「小さな一手を積み重ねていく」という点で共通しています。そんな細々とした文字や点は、時折発する小さく可愛らしい彼女の声のようでもありますし、それらの集積である作品は、静かな彼女の内にある、柔らかいけど強い芯の表れのようにも思えます。また、文字の作品や作品タイトルには色々な言葉が登場します。私たちには分からない言葉も多いですが、似た作品には同じタイトルが付けられていたり、彼女の中では明確な意味を持っているようです。時々、「おにく」など周囲をクスリとさせてくれる言葉も出てくるので、文字作品の小さな文字たちをよーく見てみてください。

明るく面白くて、おしゃれや音楽、そしてお肉が大好きな清水さん。他にもたくさんの魅力的な一面を持ってらっしゃいます。みなさんも作品たちから様々な彼女の姿を見つけてみてください。

【スタッフ/辻元 美穂】

おにく





①おちさん ②お母さん ④エプロン ⑥おにく ⑦かく ⑧なお ⑨ももこ ⑩さこ ⑪はな ⑫ふと
 ※①②④⑥⑦⑧⑨⑪⑫／紙、水性インク・⑩／紙、油性インク

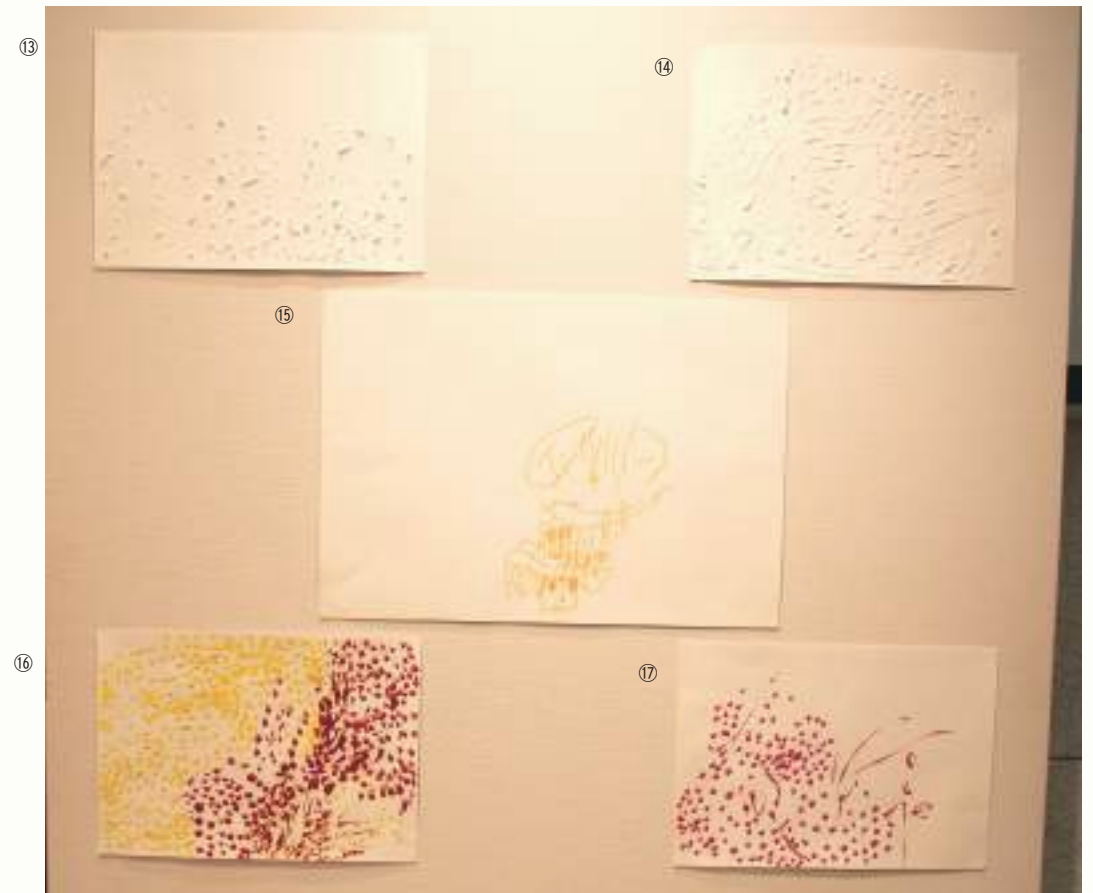
小さな字で言葉を書き連ねられた「お手紙」。書かれているのは清水さんの身近な人や「おにく」「かに」など好きな食べ物の名前、「ありと」「なかよし」なんて素敵な言葉も出てきます。どういう意味かな？という言葉も多いですが、「はと」はハート？「ほてと」はポテトかな？と、推理して読んでみるのも楽しいです！【スタッフ／辻元】

③めてし／紙、水性インク

ハロウィンパーティーの準備で制作した作品。清水さんはお岩さんのようなちょっと怖～いものも好き！ハロウィンの絵や写真を見ながら、ちょっと不気味(?)で、でもとってもキュートな表情をしたかぼちゃのランタンやお化けを描きました！【スタッフ／辻元】

⑤リこ／紙、水性インク

インターネットでカレンダーを検索するのにハマっていた時に、「じゃあオリジナルカレンダーを作っちゃおう！」ということで、カレンダーを見ながらスタッフと一緒に制作した作品です。制作したのは春なのに12月のカレンダーなのは、自分の誕生日やクリスマスを楽しみにしている…のかも!？【スタッフ／辻元】



⑬カラオケもしろいおちさ／紙、水彩絵の具、ボンド

ボンドと絵の具を混ぜたものをしぼり袋に入れて、生クリームのようにしぼり出した作品(⑮を除く)です。お菓子作りが好きな清水さん。制作姿はまるでパティシエみたい！色のチョイスもおしゃれさんな彼女らしいものになっています。【スタッフ／辻元】

⑭ももこ／紙、水彩絵の具、ボンド

⑮りほ／紙、水性インク

⑯ももこちゃん／紙、水彩絵の具、ボンド

⑰ヤキニクおくわ／紙、水彩絵の具、ボンド



⑱こほ／板

ぶあつい板を、彫刻刀で長い時間をかけて彫った作品です。元々は茶色い塗装がされていたのですが、それがなくなってしまうまで念入りに彫り進めていきました。作品タイトルの「こほ」については、他の彫刻にも同じ言葉がつけられているのですが、その真意は清水さんのみぞ知る…!【スタッフ／辻元】

持続性

上岡 板の作品は、長期間かけて彫っておられましたよね。

笠松 2カ月くらい。

鈴木 うまいこと、彫ってるんですね。彫刻刀で彫るのが危ないじゃないですか。私がこの前に来た時も彫っていて、好きなんやなと思って。あれって、気持ちがいいんじゃないかな。

中津川 たぶん、そうだろうね。彫るのが気持ちいいんだろうね。

笠松 紙をハサミで小さく切っていく「チョコチョコキ」という作品もそうなんです。続けてやっているのがおもしろいみたいで。

鈴木 作品はどちらかと言うと、あの文字のほうなんだろうなって。

中津川 彫る道具は版画の彫刻刀だもんね。彫るという行為性のほうが強い。形をつくるとかじゃなくてね。

必然性

田中 この表現がなくても、違う活動でも十分、楽しめる方なのかなって勝手に思ってしまった…

笠松 ほかの何かがあるんじゃないのかなって、清水さんに対してはいつも思いますね。好きなものがあるんじゃないかな、拾いそびれていないかなって。

上岡 アトリエコーナスに入舎されてからまだ2年くらいだから、これから出てくるのかなとか。

中津川 アートじゃなくてもいいかもしれないもんね。

コミュニケーションツール

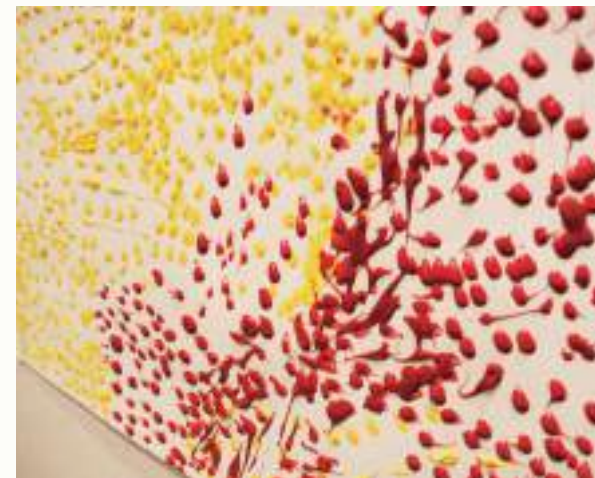
中原 文字の作品の、余白があったり、文字が小さかったり、筆圧が薄かったりというところに、彼女の気持ち、思いが入っているのかなと思いました。

鈴木 双方向のコミュニケーションは成立しなくても、文字を使っているというところに、本人にとって伝えたいメッセージがあるのかなと想像して。「手紙」というキーワードも出てきたので、本人はコミュニケーションツールとして表現しているのかなと思いました。

中津川 モノログに近いコミュニケーション。モノログこそ、本質的なコミュニケーションという



ころもあって。表現で他者に伝えるといっても、最初は自分で見て考えていくから。他者の前に、自分自身が他者であるというところがあるもんね。そうすると、モノログも他者的なところで、人とつながっているところがあるからね。そこが、割とぼんやりとしている感じなんだよね。「これこそが彼女のやりたいこと」というものが見えてきたら、変わってくるのかなというのもあるよね。



障がいとの関係

中津川 彼女はどのような障がい特性ですか？

アルガマ 明子 ダウン症。昔は発語があって、ひらがなで文字も書いて、自分の思ったことを伝えることができていたみたいです。クラスのリーダー的な存在で、ダンスも踊れて、人を笑かすこともできて…と聞きました。でもある時、お母さんの海外出張とそんな時に預かってくれる親戚の体調不良が重なって、ショートステイに入所することになって。それから左顔面神経麻痺…顔面が硬直しちゃってという。その時期に利用していた施設でも、何か意思疎通が難しくなって、発語がなくなってしまったそうなんです。

中津川 ショートステイで何かが変わったのかね？

アルガマ 明子 ショートステイで何があったかはわからないんですが、初めて、しかも急にご家族と離れて過ごすことがショックだったのかなと。昔みたいに笑ってほしいという思いを、お母さんは持っていて…

中津川 その後のフォローは？

アルガマ 明子 それはお母さんが全力でやらはったはずなんですけど…

笠松 その時期、別の施設さんにも行かれていたんですけど。そこも、いろいろあって。

中津川 さみしかったんだね。

木下 ダウン症の人は感情が深いと言われるからね。

中津川 作品から見えるぼんやりとしている感じは、そういうところと結びついているんだね。踊ったり、人を笑かしたり、リーダーシップをとったりという強いものを持っていた方が、そういうふうになって失ってしまって、今はまだそのプロセスの中にいるんですね。自信のなさや不安感が、力のないような字や空間のスカスカ感、充実していない感じとかに…

松田 いくつくらいの出来事？

アルガマ 明子 20代に入ってからよね。今28歳なんですけど。数年前…いうて、約7年前。



中津川 不安感とかね、そういうのがありますよね。あと、ダウン症の方の持つ、急激な退行…退行は始まっている感じ？

アルガマ 明子 お母さんが病院に行ってしっかり調べて、そうではないと。理由はわからないんですよね。アトリエコーナスのスタッフは昔の姿を知らなくて…それもあって今と大きいギャップを感じています。



中津川 自分の存在に対して自信がなくなっているということは、彫刻はいいかもしれないね。ガシガシガシって、ああいう力強い感じが出てくるのは。

鈴木 彫刻刀で彫ることは、ワークショップで体験したことをきっかけに、自らが「やる」と言って始めたと聞きました。私がこの前、来た時もずっと彫っていたから。

笠松 「こんなにもずっと続けてできるんや!」「すごい」とか、まわりからの承認じゃないですけど…そういう声がうわあとなったタイミングがあったんで、それもあって続けているのかなって。

松田 版画はしないんですよね？

笠松 しないですね。

鈴木 彫るのがいいんじゃない？

中津川 ただひたすら彫るといふ。抵抗感があるのがいいんだろうね。

アルガマ 明子 彫刻刀も自分で選んでいて。先端が一番V型になっていて、ガツと彫れるもの、切れがいいものを選んでいるので。やはり、彫りたいんでしょうね。

中津川 切れがいいものを選ぶ背景に、物語があると思うとすごいね。

鈴木 なんか、こう、ぶち破ろうとしている、力強い何かが生まれているのかもしれない。

アルガマ 明子 声が出ないので。

鈴木 ある意味コミュニケーション。自分の何かを訴えている。

アルガマ 明子 普段は茶目っ気のある、笑かす系の服をね、いつも自分で選んでくるんですよね。

笠松 全身に「ニンジン」と書いている…

中津川 本来の自分に戻るきっかけになるかもしれないね。僕ははかなさみたいなものをすごく感じてね。

鈴木 作品からそんな感じがありますよね。

中津川 ダウン症だと一般的にカラフルで元気な絵を描くパターンが多いもんね。

「アート」以上に根源的な問いかけがある

中津川 ぼんやりしているんだよね。木彫の作品は行為性のほうが強くて。そこに彼女の実存じゃないけど、抵抗感があるところをグイグイとやるところは、ぐっとくるものがあるかな。手紙みたいな、モノローグみたいな作品も、人に伝えたい、だけど、伝わらないみたいな。そういうところにも、弱さが持つ強さを感じる。同時にはかない感じとか。アートを逸脱しているものがあるよなみたいな感じがするな～

笠松 本人が抱えているもの、押し出したいものが、何かしらあるんですけど。それは、現時点ではアートではないのかなと思っていて。それ以上に、やりたいものがあって、今出せるツールがアート。だから、出しているのかなって。

アルガマ 明子 制作ももちろん、働きかけていけないといけいんやけど。もっと、普通に笑顔が出せたらいいなとか、そういう日常的事も叶えられていないよなということ、いつも思ってしまうので。ちょっと笑うということもたまにあるけど、もうちょっとあってもいいかなって、こっちは欲が出てきて。

笠松 最近やっつ、そういうところが見えてきたかな。これがそうだったらいいなって。

アルガマ 明子 笑うとかはなくても、清水さんはこれに手応えがあって…みたいなのを、もうちょっと感じられたらと思います。



土谷 紘加

(つちたに・ひろか)

一粒一粒ちいさなアイロンビーズをプレートに並べる指先の動きは何とも滑らか。こつこつ鍛錬を積んだかのように。行き当たりばったりの模様に見えるかもしれないが、色に導かれながら自分のイメージを確実にあらわしてゆく。きちんと選択がされている。まるで手練れの職人だ。私の今をアイロンビーズに表現する職人だ。

全くの一色で仕上げたもの。たった一粒だけ色を違えているもの。多色使いのボーダー。ばらばらに積んだ山を力強くアイロンで押し、溶かし込み歪んだもの。どれも憎いほどの色彩センスと留まる事のない冒険心が込められている。昨日と今日は違う。誰にとっても普遍的な事が、累計およそ2500枚の作品から伝わってくる。

一粒からの集合体が日々生まれてゆく。COLOR(色彩)とCOLONY(群体)からスタッフがCOLORNY(カラニー)と名付けた、これらの作品群が彼女の代表作である。

ビーズを並べてぎゅっとアイロンを押し当て、この一枚に自分なりのタイトルだって付けている。抹茶バニラ! ブルーベリーソーダ!! ストロベリーチョコマンゴー!!!

食欲旺盛な土谷さん、タイトルはほぼフレーバーである。

仕上げた作品に残るアイロンの熱を感じてみたり、手で反らせたり匂いを嗅いでみたり。今日の私を知ってもらいたくて隣のクラスのお気に入りスタッフに話しかけてゆく。話ができる。笑顔になる。作品はそのための役割も果たしている様である。

【施設長/アルガマ 明子】





COLORNY / アイロンビーズ

日々3枚前後の作品をコツコツ作り続けている土谷さん。1年でどれぐらいの作品を作っているのだろうと思い、2017年の作品をまとめたその数400枚以上！（ちなみに今回は200枚ほど展示）そしてアトリエには2500枚を超える作品！！そのどれもが魅力的で、眺めていると色彩の海に飲み込まれたような気持ちになります。個人的な願望ですがいつか全ての作品を大きな会場一面に並べてみたいー！！賛同者お待ちしております。【スタッフ/笠松】



普段は14×14cmのビーズ台を使い、均等にビーズを並べた作品を作る土谷さんですが2019年ごろは変形した作品を数多く作っていました。山盛りビーズを大胆に台の上に置き、アイロンで平たくなるまで圧着させる。均等に並べる/型にとられないが両方でできて、配色や熱の当て方や形をみても同じ作品はない…彼女の引き出しの多さに驚くばかりです。【スタッフ/笠松】



必然性

松田 似てる作品は同じ日につくったものですか?

アルガマ 明子 同じ日じゃないかな。似たようなのを同じ日につくったりとかする。

笠松 似たような作品をつくることもありますし、全然違うこともあります。

松田 アイロンビーズを並べるプレートがいくつかあって、それに並べてつくってから、一斉にアイロンを当てるんですよね?

笠松 基本は1作品ずつです。間があいて、同じような作品ができることもありますけど。並びで入っていたら、だいたい一緒の日とか、次の日とか。

中津川 あれだけのバリエーションで、色と形をつくるって、相当自分の中に引き出しがないとできないよね。本能のままにやっていると、色や形の計算ができないじゃん。だから、彼女のもう一つの日常の言語になっている感じがすごくするの。完璧なくらい言語化されているなあって。造形言語として成立していて、自分でやってみたらわかる。あんなにバリエーションができないでしょ?

上岡 そもそも色を選ぶのがしんどい。

アルガマ 明子 いつもちょっと、チャレンジがあるんですよ。

中津川 遊び心があったりとかね。

鈴木 線でも、白の線が二段くらいのもので、それがだんだん太くなったり、細くなったりしているものと。きっと考えているんだろうな、バランスとか。

中津川 同じ青とグレーの組み合わせでも、青がちょっと明るかったり。ものすごい造形言語ですよ。

松田・鈴木 窓になっていたりとかね。

中津川 その時の感情も反映しているし。

上岡 アイロンの圧の仕方いろいろ変えて。

中津川 色の組み合わせから全部、考えていますよね。だって、グレーの中に白が入る…その入り方も、絶妙に、いろんな形が入っている。本能だけだと、ああいうふうにはならないと思う。

上岡 本能だからそうなるわけじゃない?

中津川 じゃない。だって、微妙に変えているでしょ。ものすごく言語化されている。あの色の組み合わせ・構成力は特別ですよ。正方形の中に、いろんな要素が入り込んでいるから。



松田 最後まで自分でやられているので、アイロンの圧の仕方とか、盛り上がり方とか、全部変えて、それをコントロールできている。こうしたらこうなるというプロセスも入っていて、技術が向上しているというか。でも、綺麗すぎず、ざくっとしているという…センスがいい。3色混ぜている作品も、チョイスがすごいなって。

中津川 アーティストですよ。それくらい方法論と表現が洗練されているというか、絞り込まれているというか。

木下 僕はアドリブとか、即興でやっているのかと思ったけど。そうじゃないんですよ。

田中 タイトルに「スーパーカップ」とついているものが…

アルガマ 明子 全部、アイスクリームの味で、タイトルを言ってくれる。

中津川 それもすごいよね。アイスクリームフレーバーを媒介にして、自分の気持ちが出るもんね。

鈴木 そうなると、かなり計算してやっている。

大西 アイロンを当て過ぎているのは、アイスクリームが溶けたもの。

中津川 そういう具体性があるかもしれない。

コミュニケーションツール

アルガマ 明子 アトリエコーナスは16時に終わるんですけど。15時以降、自分のやることが終わったら、今日できた作品を2枚持って、自分が好きなスタッフのもとにアピールしに行きます。2枚持って踊り込んでいきますね。

障がいとの関係

中津川 こういうイメージでつくりたいというのが見えているから。こだわりよりも、プロっぽい、計算されている感じがする。あそこまで表現にがっと集中するのは、言語でのコミュニケーションではうまく伝わらないとか、そういう思いが…そっちのエネルギーを注いでいるのかなという感じがするけど。障がい特性というより、障がいがあるがゆえにコミュニケーションがうまくできないからこそ何か。エネルギーがこっちにいつているのかな、みたいなね。

本人の背景・日常が見える

アルガマ 明子 毎日違うのをつくっていて、日記のようだというところ。それは、毎日見ているから、わかるというだけで。作品からは見えないかもしれないですね。





大川 誠

(おおかわ・まこと)
1976~2016

アトリエコーナス、夕方の連絡帳の時間。思い出せない単語を絞り出すように険しい顔でノートに強く刻む誠さん。彼にとっての日常は言葉のわからない国に放り込まれたようだったかも知れない。辞書があっても、文字の読み方さえわからないし。

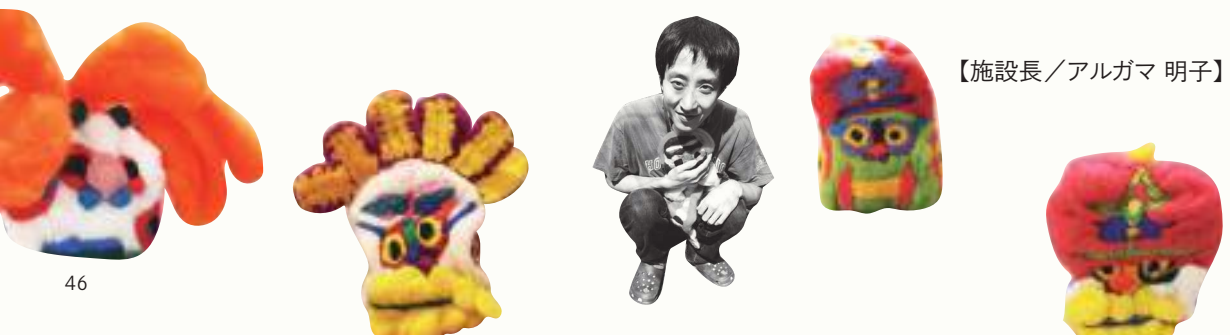
そんな誠さんは大のいたずら好きだった。ポケットにつこんだ誰かのハンカチ。リュックサックには誰かのメガネ。パレトはニヤニヤして頭を傾げ、「ゴメンナサイ!」と。チラチラこっちを見て目が合えばあっちを向く。そんな遊びをよくしていた。人が大好きだったのだと思う。

2006年、誠さんは制作をはじめ。当初それは『まこと人形』と呼ばれた。原色使いのまぶしい力強さ。人にも動物にも見えるが、異国の民芸品や宇宙人をも連想させる。黄緑の顔に青い髪でオレンジの目玉。原毛フェルトの人形でここまでの迫力のものって他にあるのだろうか。

なんの迷いもなく原毛の束をつかみニードルをたたき込む。自分も周囲も傷つけてきたエネルギーを、ニードルに放つ。その動きの速いこと。時に笑いに怒って。それを一身に受け止めた人形が次々と生まれ、誠さんの自傷も少し減ったのだった。内服で落ち着いた事実もあるが、つくる事は彼の心の一部分を徐々に柔らかくしてもいった。

2010年、彼は「カサタニサン(PR-y主宰: 笠谷氏)」と「ヨシダクン(書籍/THE CORNERSTONE 誠さんページ担当写真家: 吉田氏)」に出会う。『まこと人形』は『Makoot / マクート』へと素敵な改名をした。国内外の展覧会など、数多くのドアを開いてもらった。沢山の人が作品が愛され、その現場に立ち会った。ほんとうに嬉しそうにドキドキしながら、誠さんは新しい出会いを楽しんだ。

言葉はむずかしいから、彼はとっておきの言葉をいつでも用意して遣い回していた。それで人生乗り切っていたようなものだ。『アリガトウ!』って。小さいことにも『アリガトウ!』って。どうしたって温かい気持ちになってしまうのだった。甲高い声だった。その不思議で不器用な響きもMakootに込められている気がする。



【施設長/アルガマ 明子】



Makoot / 原羊毛

Makoot(マクート)の種類は大きく分けて、ワンレンが特徴的な「金八先生」、帽子とお髭が特徴の「サンタさん」、頭に山型の飾りがある「びょんびょん(正式名は分からないのでスタッフが勝手に呼んでるあだ名です)」,そして今回は展示していないのですが「動物」の4種類。今回はクリスマスが近いということでサンタさんを多めに選抜しました。ちなみに目元が隠れたサンタさん、帽子を被せてしまって見えないのですが顔もしっかり作っています。どんなお顔なのか…ああ、めくってみたい。【スタッフ/笠松】

about me 6を終えて どうでしたか？



施設長／アルガマ 明子

“いつかアトリエコーナスから作家ひとりでも展示に混ぜてもらえたらなあ”なんて思っていたら。今回の about me 6 では作品もアトリエコーナスだけに絞り、施設そのものも深掘りするという事で、嬉しさと戸惑いで右往左往してしまった。

コーナスの始まりは30年以上前に遡る。そのため展覧会をするにあたり、かつての様子を知ってもらえるよう懐かしの写真やコーナス通信の数々をひっぱり出して実行委員会の皆さんに見ていただいた。



施設を立ち上げたお母ちゃんたちの、毎月の親の会。障害児を連れての親子旅行。集まりの後や旅行の打ち上げでの、喧々諤々の飲み会はどつき漫才にも似て。



アートのアの字も無かった当時の様子。全く洒落た一団ではなかった。資金集めのバザーのステージでは、お母ちゃんたちが何故かプロレスをしたり相撲を取るのだ。野暮ったい。でもいいやんか。笑って悩みや苦しみを吹き飛ばそうやんか。障害があっても何が悪いねん。そんな声が写真や通信から聞こえる。笑っているけど真面目に叫んでいるのだ。

大阪のお母ちゃんたちなりの『ノーマライゼーション』を地域で切り開いてきたのだと振り返って知った。

時が流れ梅田LUCUA 1100。展示会場には洗練された作品の数々。キュレーター中津川さん・実行委員会の皆さんのセレクトは成程新鮮で、いつもアトリエコーナスで見る作品が特別なものに感じられた。about me ならでは、作品に添えた沢山のキャプション。メンバーの素朴で不器用で自分勝手に憎めない、そんな魅力も一緒に知ってもらえる事が何より嬉しかった。鈍臭いけどやってきたよと。地域で生きてきたよと。

アートって何。有っても無くてもいい。でもメンバーの生きづらさとお母ちゃんたちのバイタリティーをアートが受け止めてきたのだとしたら。コーナスには必要だったなと実感している。



スタッフ／笠松 彩菜

about me 展は、ただ作品を飾るのではなく、どのような暮らしの中でその人がアートをしているのか、周りの人や地域との関係性を丁寧に解きほぐして作品と一緒に展示され、「こんなことができるんだ！していいんだ！」が回を重ねるごとに増える素敵な企画だと感じていました。

今回アトリエコーナスを選んでいただき光栄でした。考察会議ではアトリエコーナスの日常と全員の作品を見てもらいつつ、世に出たことはないけれど面白い表現をしている人や、代表作は別にあるけれど未発表



表作も魅力的な人の作品などを、ここぞとばかりに見ていただきました。会議での考察は丁寧に新しい意見や見え方もたくさんあり、今後アトリエコーナスで出来ることがぐんと広がったような気がします。

またアート業務に関わっていると、メンバーの展覧会とはいえ、実際に作業を進めて発表しているのは周りの人間で、そこにメンバー 1人1人の思いはあるのか、何を知ってほしいのか…ということがいつも悩みの種でした。ただ今回はそれを悩みつつも、「about me ~ “わたし”を知って~」というタイトルに合わせて「私から見たメンバーとアトリエコーナスを知ってほしい」という思いで、楽しんで参加できました。

準備期間中、色々なことがありました。中でも印象的だったのは清水さんの作家紹介文についてです。過去の出来事について、本人や家族が読むとしんどいのでは…と記載しなかったことがあったのです。文章を確認した親御さんからこちらが削除した内容を記載してほしいというお話がありました。「健常者の私達も、いつどこでどうなるかなんて分からない。毎日が当たり前の日常では無いことをお伝えしたいです。」とおっしゃってくださいました。お母様の知ってほしいという切なる思いと、日々彼女と関わりながら文章を書いたスタッフや、他スタッフが築いてきた関係があったから書けた内容だと思いました。



「about me 6」を終えてから、年末年始があつという間に過ぎた今、展覧会のこと日常のことで、小さな変化がありながら、メンバーは今日もアトリエコーナスで過ごしています。ただどの展覧会でもそうですが、社会に何かを発信すると、出展したメンバーよりもスタッフや家族、外部の方といった周りの変化が大きいような気がします。それは今まで見過ごされてきた表現への評価、作家としての今後の期待といった嬉しい変化だったりもするのです。しかし、過度な変化で日常が押しつぶされないよう、得たものの嬉しさを噛み締めつつ、けれど浮かれ過ぎず、ゆっくりとアトリエコーナスの日々を楽しんでいければと思います。

この町で いきさる

“ご近所さん”から見た コーナス

この町でコーナスと出会い、交流を続けている池田美芽さんと村井由里子さん。おふたりに、コーナスと地域のつながり、アート活動などについて、地域の人目線でどんなふうに見えるのかを教えてくださいました。

★はコーナス運営の事業所等（過去も含む）

共立通



ご近所さん
コーナスの後援会員など、応援してくれるご近所さんと路地ではったり。世間話に華が咲く。

天下茶屋会館

★カフェ&レンタルスペース KIKUYA GARDEN
居宅介護・重度訪問介護サポートネットコーナス

おっちゃん

みんなにいつもあいさつをしてくれる。深い話をするわけではないが、区役所でクッキー販売をした時には、無言でどっさり購入してくれた。すぐに応援してくれている。

村井 由里子さん

タマリバ&よりみちのオーナーであり、美容師。メンバーの成人式には着付けなどもしてくれている。共立通を盛り上げる熱き仲間。

タマリバ [美容部]
よりみち [青果部] (1F)
タマリバ [レンタルスペース部]
よりみち [喫茶部] (2F)
ArtLab-Nextの就労先の一つであり、コーナスクッキーも販売中。

★生活介護アトリエコーナス

築84年の町家を改築。メンバーにとっては家、地域の人たちにとっては気軽に来訪できる場づくりをめざしてきた。来客時はメンバーがコーヒーとクッキーでおもてなし。地域の集まりの場として提供することもある。

大谷中学校・高等学校

週1回の清掃活動。地域の人たちは「コーナスさんがいつも掃除してくれるから、この通りはこんなにきれいなやね」と言ってくれているという。

西坂書店

★共同生活援助・グループホーム
バイトコーナス

★旧サポートネットコーナス (2F)
ギャラリー (1F)

★自立訓練 Art-Labox (1F)
就労継続支援 B型 ArtLab-Next (2F)

望之門保育園

阿倍野教会の敷地内にある保育園で、コーナスのはじまりの地。ここで発足した「阿倍野で共に生きよう会」を経て、「コーナス共生作業所」(系列園「マナ乳児保育園」の職員の休憩室を拠点とした)が誕生。現在も保護者にコーナス通信を配布してもらっているほか、コロナ禍前はクッキーの販売会も行っていた。

マナ乳児保育園

阿倍野警察署

日本キリスト教団 阿倍野教会

丸山通

丸山通
清掃ルート

★旧コーナス共生作業所

大阪キリスト教短期大学
この地で100年以上の歴史をもつ、幼児教育について学べる学校。学生のボランティア活動を通して、地域と深くつながっている。

大阪市立
丸山小学校

池田 美芽さん

専門領域は西洋哲学・倫理学の特任教授。白岩高子代表が望之門保育園保育士時代にお子さんを通園させていた。その頃からの長いつきあい。当時からコーナスクッキーの大ファンで、現在も定期購入中。学生を連れて、コーナスに交流に訪れることもある。

聖天山公園

コーナスのあゆみ&ご近所マップ
詳細版はこちらよりご覧いただけます！



至浜寺駅前

この町で コーナスの歩みと出会い —阿倍野の古き街角から—

池田 美芽 (大阪キリスト教短期大学 特任教授)



アトリエコーナスの作品展が、ビッグ・アイの「about me ~ “わたし”を知って~」の一環として行われたという。コーナスの作品展はこれまで何度か行われており、足を運んでいたが、また別の感慨が深い。それは、この活動が大阪市阿倍野区で30年以上にわたって続き、確実に地域を変え、私たちを変えてきたという歩みが確かなものとされたからだ。

コーナスとの出会いは、かれこれ30年前にもなる。当時白岩高子代表が勤めておられた望之門保育園に二人の息子を預けて、そこから歩いて3分の短大に勤め始めたころだ。新米ワーキングマザーとして、初めての短大での仕事がうまくいだろうか、それ以前に子どもたちが熱を出さないだろうか、保育園に馴染んでくれるだろうか、と不安な毎日を受け止めて、子どもたちの成長を見守り助けてくださった当時の保育園の先生方にはいまも心から感謝している。

望之門保育園では、月1回、コーナスのクッキー販売があった。人気なのですぐ売り切れてしまう、と先輩ママさんから教えてもらった。やっと買った時、そのバターをたっぷり使った濃厚な味わいに驚き、すっかりファンになってしまった。無論、息子たちも大好物である。そして乳児保育園の3階に、コーナスの作業所があることも知っていたが、どんな活動をしているのかはよく知らなかったのに、このクッキーを通して一気に親しみを覚えた。

やがて息子たちは卒園し、あまり園にも寄りなくなったが、ある日、阿倍野区役所でのイベントで、久しぶりに白岩先生にお会いし、そこから共立通に移転したアトリエコーナスにお伺いし、交流が再開した。

そこでは、馴染みの方々が、アート活動に熱中し、実にユニークな作品を作っていく。銘々好きなことをして、ゆったりと時間が流れる。そばではクッキーを焼くいい香りが流れてくる。阿倍野は古い街で、戦災で焼け残った昔の長屋の雰囲気は今も残っている。そんな戦前からの建物を生かした作りで、風通しがよく、古い調度がよく似合う。そういえば、昔はこんなふうに時間が流れていた。いまは分秒単位で仕事や活動が管理されるのに、ここでは自分の内面から生まれる時間がある。その心地よさに、ゼミの学生さんをコーナスに必ず連れてくるようになった。限られた時間だが、地域にこのような場所があり、障がいのある方がこんなふうに活動しておられること、その自由で家庭的な雰囲気に驚いていた。「言葉で表現し切れない温かみで落ち着いた感じ」と言ってくれた。

さらに彼女たちは、どうやって支援しておられるかに注目していた。「私たちが子どもたちと触れ合う時と共

通しています。言葉は十分でなくても、その人の眼差しや気持ちは伝わります。その気持ちを損ねないで、同じように楽しめばいいんですね」と一人の学生が言ってくれたことは本当に嬉しかった。彼女たちが、幼児教育という自分の専門の力を通して、人と関わる基本的な力を身につけてくれていたから。

しかし、コーナスがこんなふうに受け入れられるのには、世の中が大きく変わらなければならなかった。重い障がいのある方が地域で生きる。今でこそこの理念は当然のようにになっているが、そうなるまでは本当にひどかった。いまから半世紀前の日本では、障がいのある方は、家族が世話を担い、人に隠し、社会との交流もほとんど絶たれていた。「障がい者は親より先に死ぬのが親孝行」とまで言われた。また、障がいのある人は、人一倍努力して社会に適応しなければならないという偏見や、内職などの下請け仕事を極安の賃金でするしかなかったことなど(コーナスの初期もそうであったと聞いている)。だから街中で障がいのある方を見かけることはほとんどなかった。

だが、それは障がいのある方を閉め出して街や暮らしが設計されているということだ。それは、健常と呼ばれる人たちにも不便で辛い。ベビーカーを連れて、車いすでも、体調の悪い時でも高齢で身体が弱っても、たちまち利用できなくなる。そうした街や暮らしを見直し、弱い立場の人から考え直す「ノーマライゼーション」が理念化したのはいまから約30年前、ちょうどコーナスの歩みと期を一にする。きっかけは障がいを持った子どもたちが、地域で一生を生きることができること。いまでも日本では、「無理なくいいやん。施設なら専門のケアできる人もいし、安心だし」と思う考え方が多い。そうではない。身体に不自由があっても、支援が必要でも、私たちはどこでも人間らしく、自分らしく生きることができなければおかしい。世界の主流は、すでに地域で、普通の人暮らしするように、普通の生活をするこに変わっている。自分の好きなものを選んだり、自分のやり方で自分を表現したりは、決して贅沢ではない。どんな時にも私たちは自分らしく生きる権利を持っている。障がいがあるが、人として生きる喜びを共にするように生かされている。そんな大切なことを、阿倍野で、昔からの人々が生きる街で実践してこられたのがコーナスである。様々な偏見や抵抗も、きちんと受け止めて対話し、この人たちの生きる場を作ってこられた。そしてそれは、私たち一見健常な人間にとってもとても大切なことであつたのを教えてくださった。コーナスとの出会いの日々は、私にとってかけがえのないものとなった。



池田 美芽 (いけだ・みめ)

1958年生まれ。大阪大学大学院文学研究科出身。大阪大学博士(文学)。大学で西洋哲学を学び、大阪府立高校教諭を経て1992年より大阪キリスト教短期大学で教える。2012~16年、大学学長を務める。2018年より特任教授、桃山学院大学兼任講師、同志社大学嘱託講師。キリスト教と女性と文楽をテーマに研究と執筆を続ける、自称「大阪のおばちゃん哲学者」。

村井 由里子 (タマリバGROUP 代表)



美容室をオープンして早12年。
干支が一周するというのは何とも感慨深い事。
そして、アトリエコーナスとお付き合いも同じ年となります。

オープン準備をしていた際に「何が出来るんですか？」というお声がけを頂きコーナスの存在を知り、開店祝いいただいたお花を片手に恐る恐るアトリエに挨拶に伺い大歓迎を受けた事を昨日の様に覚えています。店としても個人としても仲良くお付き合いをさせて頂き、色々なお話を聞いたり見たりしていく中で障害を持っている方やご家族の方々の現状を少しずつ知る事が出来ました。

美容室と障害者施設という一見、関わりの薄いような間柄でありながら、今日までお付き合いが続いている理由を考えた時、一番に挙げられるものとしては「地域に根付く」と私は思います。コーナス代表の白岩さんがおっしゃる「地元で育ち、地元の方と交流し、地元で働く」障害を持っているようがいまいが、自分が生まれ育った町(土地)に居て生活する幸せ。私も今ある場所が地元の間人であり、地域の方々に愛される店を目指してきたからこそ、心より共感出来るのです。地元が重要だという事ではなく、居場所がちゃんと傍にあるという事が大切なのではないのでしょうか。



数年前、成人式の着付けのお手伝いをさせて頂いた事がありました。帯を結んだだけでしたが、女の子が着物を着て成人式を迎えるという普通の事が障害を持っている方にとっては簡単な事では無いという事を知りました。聞けば、何日も前からスタッフの皆さんが計画を立て、準備をし、メンバーの体や心のバランスを取りながら無事に終わるように願って当日を迎える…。自分にとっては何てこと無い仕事。でも、仕上がった時の皆さんの(特に当人達の)喜んでくれている顔を見た時、何とも言えない遣り甲斐を感じました。

普通の事が普通ではない事。でも、それを「普通にする」という事は周りのちょっとした環境作りで可能になるのではないかと思います。私の様に小さな美容室が少しのお



手伝いをするだけで素晴らしい結果を得る事が出来たという事は、地域全体やもっと広い社会全体で様々な障害を持った方をサポートしていけば、より多くの喜びや過ごしやすさが生まれていくのではないのでしょうか。



2020年よりコーナスの就労継続支援B型の受け入れをさせて頂いています。真面目に一生懸命お掃除をしてくれているメンバーと彼らを支えるスタッフの方々。始まった当初は慣れないが故にメンバーもスタッフもぎこちない動きで…それでも、何が当店にとって良いのかを考えて頂き、常に私共の要望にしっかりと応えて頂きました。おかげ様でいつも綺麗な店内環境を保っております。当店の飲食部門では週2日、コーナスから給食のオーダーを請け負っていて、保護者の方の負担軽減だけでなく本当に美味しいし、いつも楽しみにしていると嬉しいお言葉をいつも頂戴します。何よりも繋がりを大切にさせて頂いて、「折角ならタマリバさんで。」と仰って頂く事に感謝しかありません。「お互い地域を盛り上げていけるように頑張ろう!」と、いつも背中を押してくださる白岩さんを筆頭にコーナスという存在が当店にとって、無くてはならない存在です。

障害の有無は関係なく、人は一人では生きていけないものです。ハンディキャップがあっても対等にお互いに必要なものを分かち合い、与えあえる存在と共存していく大切さ。それを、地域で実現し、沢山の人間に広がっていく社会を心より望みます。それには、先ず自分がこの先の可能性をコーナスの皆さんと共に見だせるようこれからも務めて参りたいと思うのです。

地域に根付いて



村井 由里子 (むらい・ゆりこ)

大阪市阿倍野区に生まれ育つ。高等学校卒業後、美容室に就職。2011年6月、共立通の古民家をリノベーションし美容室をオープン。2019年12月に新店舗を設立移転。青果店、飲食店、美容室、レンタルスペース、駄菓子屋を1つの建物内に集合させたリトル商業施設の代表となり現在に至る。



アートのある、ごくふつうの日常

木下 真

(福祉ジャーナリスト)

コーナスの前身である「阿倍野で共に生きよう会」が発足したのが1981年。国連が定める国際障害者年であり、世界中で障害者の社会参加のための環境整備が大きく推し進められる出発点になった年だ。

コーナスの代表理事である白岩高子さんが、その国際障害者年の国際大会の報告会で衝撃を受けた言葉が「ノーマライゼーション」だったという。障害者が福祉の専門家などによってすべてを管理されるのではなく、自然な生活や開かれた人間関係を手にして、ふつうに社会生活を営んでいくという北欧発の考え方だ。

「阿倍野で共に生きよう会」は、この考え方に深く共感した白岩さんが仲間の母親たちとともに立ち上げたものだ。会が町の中心地から離れた閑散とした場所ではなく、多くの人々が暮らす住宅街を活動拠点としたのはそのため、「ノーマライゼーションの社会になるのを待つのではなく、自分からつくろう」と考えたという。

会の発足時には、まだアート活動は行われてはならず、母親たちが中心になって、バザーやキャンプやミニコンサートなどを企画し、地域と交流を深めていったという。アート活動を始めたのは2005年からで会の発足から20年以上経った後のことだ。

ノーマライゼーションは大切な理念であり、共感する人も多いと思うが、それを実現するには苦労が多かったのではないかと思う。近所の住民たちとの関係づくりも大変だが、重度の知的障害者の場合、世間一般の社会生活に合わせる大きな束縛やストレスになることが少なくないからだ。

その意味でいえば、今回の「about me 6」のテーマである「この町でいきる」は、障害者がいまある社会に自分を無理に適合させるのではなく、本来の自分を失わずに生活していくチャレンジと考えるべきだろう。コーナスがさまざまな試行錯誤を繰り返した後に、アート活動にいそいしたのは必然だったのかもしれない。

障害者のアート分野では、障害者福祉とアートを結びつけて考える人が多いが、極端な言い方をすれば両者は無関係だと思っている。アートはアートで独自の価値をもっている。それはコーナスのクッキーのおいしさが、障害者福祉と直接には関係ないのと同じだ。しかし、その関係のなさが、結果的にノーマライゼーションにとっては重要になるのだと思う。

アートの魅力はさまざまあるが、そのひとつが自発性なのではないだろうか。支援者は「ピンクに塗ろう」と提案できるが、「ピンクに塗りたいと思え」と指示はできない。「貼り絵をしよう」と提案できるが、「貼り絵に夢中になれ」と指示はできない。絵の描き方は指導できるかもしれないが、自発性は指導できないのだ。何が本人にとって自発的な表現なのかは、本人以外誰にもわからない。だからこそ、自己表現なのである。

植野康幸さんの描くガールズ・コレクション、大西祐史さんの丸シールによるクリスマスツリー、土谷絃加さんの「メロンソーダ味」のアイロンビーズ、清水和香奈さんの不思議な文字の手紙、清原雅功さんの巻き戻しカレンダーを誰かの指導によって生み出すことなどできないのだ。そのようなかけがえのない自分というものを発現できるからこそ、彼らは「この町でいきる」と言えるのではないだろうか。それは誰かに評価されるからという動機よりもっと根源的だ。



アート活動は彼らの生活にとって欠かせないものになっているが、それはコーナスで行われている活動の3割に過ぎないという。アートがすべてという生活をしているわけではなく、気が向かなければ、1年間まったく絵筆を握らず、作品を作らない人もいたという。それでもまったく問題ないそうだ。それくらいアートづくりは本人の意思に任せられている。その関係がまさに対等でノーマルだと思う。

コーナスと付き合いのあるご近所の人たちの中には、アトリエでアート作品が作られていて、それが国内外の展覧会で賞を受賞していることなど、まったく知らない人たちも大勢いるという。

アトリエコーナスのアート活動はリハビリのためでもなく、芸術的な評価を勝ち取るためでもなく、社会変革のために行われているでもない。文学的な言い方をすれば、ひとりひとりが自分流のやり方で魂を外に開くための営みにすぎないのではないだろうか。しかし、だからこそ、周囲もその人を個人として尊重できるのかもしれない。

ある障害者アート分野の大御所は、コーナスを称して、「大阪のおばちゃんがあそこまでやったのがすごい」と茶化したそうだが、生活感覚あふれる、人と人のかかわりを大切にしている大阪のおばちゃんだったからこそできた、ノーマライゼーションであり、アート活動なのではという気もしている。

「about me ～“わたし”を知って～」は鑑賞者のためのアートではなく、制作者のためのアートを深掘りする展覧会。そこがユニークであり、いつも刺激的である。次回の「about me 7」も大いに期待している。



木下 真(きのした・まこと)



1957年長崎県生まれ。福祉ジャーナリスト。NHKの福祉番組のリサーチ、ネット記事の企画執筆を行っている。知的障害者の施設や障害者の雇用問題などのテーマを扱ってきた。日本子ども学会常任理事でもあり、障害のある子どもの発達や療育への関心も高い。一般社団法人障がい者スポーツ・アート・ミュージック振興協会(HANSAM)のディレクターでもあり、障害者のアート作品のファンサイト「旅する絵のギャラリー」の運営にも携わっている。

「about me 6 ～“わたし”を知って～ この町でいきる」を終えて

西脇 大祐

(特定非営利活動法人WiD 理事長)

実行委員会メンバーとして、今回初めて参加させていただきました。企画を通して他事業所の支援員の方、専門家の方と交流の機会をいただけたことを嬉しく思います。

展覧会に向け長時間かけておこなわれた考察会議は、とても有意義な時間でした。同方向の意見の中にも複数の視点があり、真反対の意見の中にも共通の視点があり、来たる展覧会の豊かさを象徴するようでした。

about me の“me”は「作家」や「支援員」を意味し「人」に重点をおいた展覧会ですが、改めて振り返ってみると「そこに登場する『人』たちが『物・事』に夢中で向き合った日々の記録」であったようにも思います。その日々の持つ意味や価値はその「人」たちだけのもの。評価することも評価されることも忘れて『物・事』に向き合う時間とその喜びを追体験させてもらえる、そんな展覧会だったように思います。

アトリエコーナスの皆さん、素敵な体験をありがとうございました。



西脇 大祐(にしわき・だいすけ)



特定非営利活動法人WiD(豊中市)理事長。1988年生まれ。京都芸術大学芸術学部卒業。2012年より福祉に携わる。就労支援事業所にて日々の生活支援や作業支援のほか、創作のサポート、展覧会の企画運営、商品の開発などをおこなう。2021年に特定非営利活動法人WiDを設立。同年6月に開所した就労継続支援B型事業所WiDの運営をおこなっている。



展覧会チラシ

制作/小森 利絵、いけながしろう(かえるぐみ)

展覧会リーフレット

制作/小森 利絵、いけながしろう(かえるぐみ)



とある日。鈴木プロデューサーから「今年はコーナスさんをお願いしたよ」との言葉。えっ。わたしに衝撃。「ええのんですか？」

共立通に馴染むアトリエコーナスの建物はたたずまいだけでなく、メンバーさんもスタッフさんも居心地も最高。コーナスさんが自主営業しているKIKUYA GARDENでお昼を食べて(キャロットケーキ最高)アトリエコーナスや共立通の取材を進める日々。ついつい通い過ぎて鈴木プロデューサーから「何しにそんなにいくのん」と言われたり。

アート、表現活動もする。体操もする。季節の行事も、散歩も、クッキーも。1日のスケジュールを彩る活動の1つ1つに、共立通とそこに生きる人々との日常がある。浮かぶのは自岩高子代表のノーマライゼーション。

メンバーからこの居心地の良い世界がひろまっているのだ。大切に保管されている作品や表現の数々は、スタッフの見つめ寄り添う努力と時間と気持ちのあらわれだ。

冊子にあたって、コーナスメンバー、ご家族さま、スタッフ、共立通の皆さん、実行委員会のメンバーにはギリギリの表現をお許しいただきました。本当にありがとうございました。財産がまたひとつ、増えました。冊子から、好きな表現や作品、気になる言葉はありますか？ “わたし”をあらたに見つめ、見つける機会となりましたら幸いです。

上岡 亜希

コーナスのあゆみと近所マップリーフレット

制作/畠中 英明、いけながしろう(以上、かえるぐみ)



全ページは
こちらから
ご覧いただけます!



展覧会作家紹介動画

制作/中市 和磨

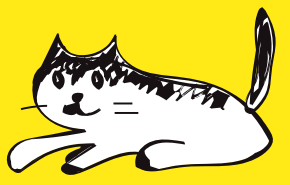


セミナー動画

制作/株式会社 NONG CREATIVE



2つの動画は
こちらから視聴
いただけます!



光つとであえる、いろんなこと



障がいのある人の芸術文化活動、参加支援、事業づくりなどについてのご相談は「国際障害者交流センタービッグ・アイ」相談窓口まで。

Eメール arts@big-i.jp

ウェブサイト <https://www.big-i.jp/>

「about me 6 ～“わたし”を知って～ この町でいきる」

発行年月:2023年3月

発行元:国際障害者交流センター ビッグ・アイ

〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1

TEL:072-290-0962 FAX:072-290-0972 <https://www.big-i.jp/>

企画制作:鈴木 京子・上岡 亜希(国際障害者交流センター ビッグ・アイ)

編集:上岡 亜希(国際障害者交流センター ビッグ・アイ)

編集補助:小森 利絵 校正:畠中 英明(かえるぐみ) デザイン:いけながしろう(かえるぐみ)

主催:  大阪府